

国語教育と人間教育

——小説の学習指導体験記——

武原弘

一 はじめに

さきに行なわれた光葉会集会で、「生まのままの実践報告でも。」と励まされまして、感謝と同時に責任を覚え、恥をしのいで小話を発表いたしました。本稿はその記録であります。多忙を口にするほどに謫書が忘れられるような実践生活の中に、公表すべき研究作品が生まれようはずがないのを悔いながらも、一年間を過してみれば国語教育の足跡がかなり明瞭になってきますし、そこを思いきって口筆のぼせては、これもまた修業の一つだと心に決めて、先達の御批判を抑ぐことが喜びとする次第であります。

題目が誇張にすぎるとはありますが、私の実践生活の出発点でもあり同時に今までの総決算がこれでありましたので、私としては忠実に天意に殉じたつもりです。

取りあげる教材は国木田独歩の「春の鳥」(総合・新国語八土井忠生編)高等学校一年(所収)で、小説單元々小説の窓々の三つの作品(志賀直哉「焚火」芥川龍之介「羅生門」が続く)の中の最初のものであります。学習者は長崎県立佐世保南高校一年生。授業クラスは男女とも二十五名前後で、編成に特別意図が加えてはありませ

ん。時期は昭和三十六年六月下旬で、いま一年を経て整理しようと思ふとき、必要な記録やメモが散逸していることを大変残念に思いますが、乏しい資料と記憶に頼つて小稿をつづるような次第です。本報告の構成を予め略記しておきます。先づ「春の鳥」の授業経過をお伝えいたします。このとき、授業の実際をできるだけありのまま正確にお伝えしたいという考えで、途中、作文の紹介がありません。これが大きな目標でありまして、次に、その授業終了後に関連して起った問題を具体例によって報告いたします。授業の反省ということにもなりますが、実際のある体験を簡略に記し、一國語教師としての思索を結論とする予定であります。

二 『春の鳥』学習指導例

計四時間を要し、その間宿題を一回行ないました。

目標は『春の鳥』全体から独歩の浪漫主義を感じせしめることが一番であります。もっと具体的には、次の二点を頭に置いてかかりました。

1、正確に説めるようになる

2 自分の説後感をはっきり表現させ、それを普遍的な思想感情に結びつけてやること。

2 はやや抽象的な表現であります、小説の学習においては自分の感銘をしっかりと持ち、それを発表することが重要であるのみならずそれを教材に含まれる人間一般の普遍的な次元と関わるよう指導するのが指導者として大切であるうと思つたからです。作業としては全員に感想文を喜んで書く気持ち喚起させ、実行することです。さて、授業のありさまを順を追って筆写してゆきたいと思ひます。

時限数	大勢	授業展開	△所為▽
①	小説入門と通説	○「小説」を読むことがまりない現況批判 ○今まで読んだことがある小説を自由に挙げさせる。板書。感銘を加えさせる。 ○小説を読もうの談。私の体験談を通して、興味を喚起する。↓く美人草 ○通説 4名(男女2名ずつ。指名は無意図的)	○小説後感想文を皆んなで話し合いたいこと、もつと深く研究したいこと。西洋紙を配布
②	展開(1)	○感想文の型(タイプ) 概評……△口頭▽ ○作品構成の分析 (注) 構成を考えながら、難解語句、不なれな表現を解釈、吟味、二段まで	○前時間の続き、三、四段の難解語句、不なれな表現を解釈、吟味 ○感想文例プリント配布
③	展開(2)		

「白痴と天使、なんという哀れな対照でしよう」(P. 106)
 「自然の子」(P. 106)
 「人生ふしぎの思いに堪えなかつた。」(P. 108)
 ○Bが問題意識を喚起したところで「お前は死んだほうがしあわせだよ。」(P. 109)という母の言葉に興味をつなぐ

④ まとめ
 ○白痴はしあわせか△話し合い▽結論なし
 ○アンドレ、ジイド「田園交響楽」の話をして助言とした。
 ○感想文に芽生えている、他の問題点
 (1)母の、言葉と動作の矛盾 (2)文体のこと
 (3)ワーズワースの影響
 ○国木田独歩の文学史上の位置、思想、その他
 ○漢字をノートに整理しておけ。
 ○難解な表現についてはノートにまとめよ
 (ノート整理は私の最終命令)

第一時限。小説単元への導入が必要です。いくらから脱線気味でしたが、これまで読んだことがある小説の名をいわせたり、私自身の読書体験をまじえたりして、かなりゆつくりやりました。生徒たちは今まで「坊ちゃん」とか「わが輩は猫である」など、また「破戒」などをやかましくあげました。独歩などあまり読んではいませぬ。一体に小説を読む生徒は極く少数です。私は読書のすすめにしきり声を大にしましたし、漱石文学にからんで「虞美人草」について、私の説後感を話してやりました。また、芥川の「杜子春」な

どはなつかしいだろうと、触れてやりました。教室はかなりざわざわしていましたが、生徒の興味と関心を小説に結びつけることはできたと見てとりました。そのちに、教科書に入りました。まず通説です。4名に指名、朗読させました。おわりに臨み宿題を出しました。読後感想文と「もっと深く研究したいところ、理解しにくいところ、みんなで話し合いたいこと。」を書いて提出することです。用紙はこちらで用意しました。(西洋紙)

二時限。本格的な作品読解の時間です。はじめに、作品全体の構成を考えさせました。全体は原作においてすでに四つのパートに分けて書かれていますから、それに従って荒筋をまとめさせる方法です。あくまで生徒の自力でやらせるよう、待つて待つて発言を探していき、どうにか次のようなまとまりを得ました。その時の板書です。

一段、作者と六蔵の偶然の出会い

二段 六蔵の境遇と作者の同情の深まり

三段 六蔵の性格(癖)

(1) 数観念が欠けている

(2) わんぱく者

(3) すく泣き、すく笑う

(4) 俗歌をよく歌う

——美しい自然の中で——

(5) からすが好き

四段 六蔵の不慮の死と母親の悲しみ

なお、このまとめ方は簡単すぎるのですが、生徒が自分たちで創

造した言葉でありまして、これだけで、相当の時間を食いました。続いては、難解語句や不なれな表現を中心に、最初から細かく吟味してゆくことが私の計画です。

小節ごとに区切って指名読みをさせ、いちいちの言葉をおさえていく作業で、容易にみえ、非常に骨の折れる仕事です。この時、語句の辞書的な意義を発表させ合うことだけに終らせないよう、登場人物の性格や心理上の機微を把握していくように努力しました。例えば「いくつかね、年は？」と私が問いますと、げげんな顔をしていますから「(一章)のところ、」と「げげんな顔」とはどんな顔かという問が出されます。「不思議で納得のゆかない顔」という答があります。すかさず、「なぜそんな顔をしたのであるかね？」という問につなぐという具合です。また、小節ごとに読み区切るといっても、その部分だけにとらわれずに、その部分を理解するに好つごうな他の関連叙述を探させることも必要です。要するに、部分の叙述は全体の主題との関連において、また、全体の把握は具体的叙述を根拠にする、という有機的な思考態度なのであります。例えば、「泣きも笑うも喜ぶも悲しむもみな普通の人から見ると調子が狂っているのだからお哀れです」(二章)など、「調子が狂っている」ことが、他のか所ではどのように描かれているのか、また、「哀れです」という作者の批評はこの作品では重要な要因となっているはずだが、その哀れみはどのように深まっていくか、それがあらわれているか所をずっと追跡させてみるとかいいうぐあいです。

小説学習のばあい、このような言葉の形象性を感得せしめることは全く大切なことだと考えます。言葉の形象性は分析作業と同

時に統合作業をすすめるのでなければ明らかになりません。学習とは本来が分析する作業を中心に行っていることですが、それだけに終るならば、語句の学習にはなりえても、小説の学習にはならないからです。あくまでも作品全体の有機的関連に基づく構想に近づき、ことばの生命にふれることが大切だと思います。たゞ、私がここで特記したいことは、その逆の誤謬、つまり、作品の全体やその思想に性急であつて具体相としての語句、文末詞などをきりおとすという危険です。むしろ、若い青年教師にありがちな性急さが、唐突な作家論や作品論に入れ、現場での具体相であるところの生徒の頭上を、にぎやかに空飛する哲学や文学に急上昇していくというようなことを心にとどめおくべきです。私はこの危険をより強く感じていましたから、こういう作業を基礎からはじめようと試みたわけです。漢字などもいくつかはとりあげましたし、会話文などは文末の説み方に再三注意を与えましたし、主語、述語を探すという場面もありました。こうして二章の終りまで進みました。

三時限。前時間の続きとして、三・四章の説解作業をやりました。一体、生徒に発言させることを私は授業の大きな目標にしておりますから、時間的に多少浪費があつたかと思ひます。前時間と大体同じですが、変わった点は、作品の核心部と思われるか所（三か所）に力点をおくやり方にしたことです。「空の色、日の光、古い城跡、そして少年、まるで絵です。少年は天使です。この時私の眼には六蔵が白痴とはどうしても見えませんでした。白痴と天使、なんと哀れな対照でしょう。しかし私はこの時、白痴ながらも少年はやはり自然の子であるかと、つくづく感じました。」（三章）

——「六蔵のことを思うと、いろいろと人生ふしぎの思ひに堪えな

かつたのです。人類と他の動物との相違。人類と自然との関係。生命と死などいう、問題が年若い私の心に深い深い哀を起しました。イギリスの有名な詩人の詩に『童なりけり』というがあります。それは……（以下略）——「哀れな母親はその子の死をかえつて、子のためにしあわせだと言ひながらも泣いていました。（以下略）」（四章）この三カ所に問題をできるだけ集めてゆきました。そこを再び読み、言葉の意義は生徒にやらせましたが、しめくくりとして私が解説を加え、この所（特に前の二カ所）が主題の最もよくあらわされているか所だと指摘してやりました。独歩の浪漫主義的自然観、純粹な人間の内的世界などが核心であろうかと思ひます。

さて、私はこの時間、生徒の感想文をプリントして持って来ており、配布する機会を得ました。特に注目されるような文章を四例プリントしました。筆者の名はもちろん匿名です。私が朗読して片言評語を加え、感想文がこの作品のどのようなどころを、書き手はどのよう感じとめ、どのような思想に関連しているかを説明してやりました。ちょうど終鈴が鳴りましたが、生徒間に、いま朗読した感想文のB（後述）が相当問題になつたらしいので、次の時間はそのことについての話し合いをするという予告で、退室しました。

ここで、折入つて感想文（生徒作品）の吟味をしたいと思ひます。なお、授業中、以下述べるような細かな検討をしたわけではありませんが、その感想文が基礎となつて、四時限の授業が全くスムーズな活気ある進行を得たことを付記しておきたいと思ひます。

三、感想文の分析と授業の結末

生徒五十名の感想文を、いま主題別に分類していきますと大体次のようになります。

A 白痴の六藏に対する同情

B 白痴の六藏を天使として賛美する

C 母親の愛情の深さに感動

D 主人公の人間愛、教育熱に感動

E 作者の自然や人生に対する神秘観

この分類において、Cに属するものが最も数多く全体の約五十%を占め、次いでAが多く、BやEは比較的少数だったけれども作品の核心をついています。Dだけを述べたものはごく少なくCと同じは同一の文章に相関連してあらわれたのも一つの特徴であったかと思われまふ。そういえば、ABC……と右にあげた分類はきわめて蓋然的なもので便宜上のものにすぎないことはもちろんでして、實際の感想文においては、同一の文章に種々の要因や主題が混在または交叉しているというのが正確なわけですが、立論のつごうから敢えてそのままにしておきます。

Aでは、六藏が白痴であるため普通の人間においては起りえない生活をしており、また常識を脱した死に方をする事について卒直な同情をよせたものが書いた感想をとりあげました。「白痴のみじめさあわれさを強くあらわしていて読む人を強く感動させる」(女)「六藏はなんとかわいそうな少年だろ」(男)「白痴であったばかりに短い薄幸の生涯を終えた六藏ノ何ということだろう。……読んでいくうちになんともいへぬ感動におそわれました。」(女)このような同情は六藏と自分(尋常な人間)との比較から湧くばあ

が多く、「私達のように普通の人間として生まれてきた者はなんと幸福なことだろう。」(女)という感慨も生まれるのでしよう。このA型の感想文でいまひとつおもしろい特質は、六藏に対する同情がさらに現実の日本の社会に対する批判となっていくばあいが少ないということだ。「今まで日本の社会はこんな白痴に対しては冷たかった。実際白痴に生まれたら早く死んだ方が本人にとって幸福だというような社会なのだ。昨年日本で精神薄弱者の為の法律ができて、これからはこの人たちの人権も守られ、楽しく天寿を全うすることができそうになったことは、喜ばしい限りだ。」(女)「私たちのまわりにこのような不幸な青少年がいたら、私はこの作者のようにできるだけのことをして彼らを助けてやりたいと思う。」(女)「このような精神薄弱児の教育は大変むずかしいと思うが、もっと施設をふやして早く普通の人と同じような知能の働らきを加えてやりたいものだ。」(男)この感受のし方は文学作品を味わう態度としてひとつの場合ではあろうが、なお未熟な感想といわざるをえないでしよう。

Aのばあいの代表的な感想文を一例引いておきましょう。

六藏も姉のおしげも、なんとという悲しい運命を背負っているのでしょう。健康で何一つ不自由のない生活をしている私たちにはその人たちの苦しみや悲しみはわからないものです。「おし」でも「つんぼ」でも不幸には違いありませんが、思つて感ずることはできません。教育しようと思えば何らかの方法でいくらでも教育できます。が、白痴となると人の形はしていても、することなすこと調子が狂っていて、いくら教育しても効果は薄いでしよう。この世に白痴という運命で生まれた人は、その

苦しみはなみ一通りではありますまい。人間はみな同じ地上に生れながら、なぜこう差があるのでしょうか。勉強の上位下位はその人の努力によって生じるでしょうが、白痴とか不具とか、そういう運命をなぜ人類の一部の人だけが背負うのであろうか。明日を背負っていく我々若人は、一日も早く今の世からこんな不幸な人が一人もいなくなるようにしたい。偉そうなことをいう私ですが、それだけの能力はありません。ともかく、世の中の人皆が身体障害もなく幸福にくらせたらと思うのは、勉強のできるできないをとわず同じです。(女)

次にBはAに正面から衝突します。

六藏は白痴でありそのために短い一生を終えるのでかわいそうだという人が多いと思う。私にとってはむしろ大変うらやましいことである。彼は世間のやかましい問題を考えたり、それに悩んだりしなくてもよいし、その上、彼には魂の友というべき自然がある。自然の中で自由に走りまわり、何も考えないで……(以下略)(男)

また、女生徒らしい感覚で「私は白痴を限りなく美しいと感じました。」(女)とも読んでいる。こういう感想は多かれ少かれ全部の生徒に背かれるところではあり、また、はっきりと肯定し主張する気にもなれないというのが実際でしょう。授業中最も問題となった貴重な感想文を全文紹介いたします。

白痴の少年の死、それを少年のため幸せだと知りつゝも、悲しむ母親。私は遠い日に、できた事は違ふが内容的にはさして変らない事実が、身辺に起つたことをかすかに憶えているような気がします。少年が死んだことを少年の身になって考えてみれば

ば幸せにもなりましようが、残された母親にとってみれば悲しいことにちがひありません。母親として子のためを思いながら、なおかつ自分の悲しみを押えきれない姿こそ、矛盾しているようでも人間の姿ではないでしょうか。私はできることなら白痴になりたいと思います。なまじっか頭が人並みにあるばかりにこのような毎日をすごしているのが苦痛でなりません。白痴でないならもっと頭がよければいい。努力だ、努力だといってもやはり問題は頭だと思うのです。私は勉強のことも感情のこともほんやりしたものを望んでいるのです。素朴で純なもの、純粋なもの——今の私に欠けている最大のものでこれだと思ふのです。素朴でありたい。鳥のまねをして死んだ少年こそ純そのものではありませんか。考えないこと、あるいは考えることのできないこと、これは一見哀れなことのように思えますが、私には幸せなことのようには思えます。人間は考えます。動物は考えません。人間は自然に対抗します。動物は自然にいだかれるままです。私は考えれば考えるほど頭が空白になることを望みます。六藏はその鳥とだけ違っていましたらう。というところを説んでなぜか悲しくなり、憤りさえ感じ、涙が出ました。なぜ悲しいのか。漠然とたゞ漠然とそう感じるのです。白痴になりたいと願う私は不健全な人間なのでしようか。(女)(傍点稿者)

右の文章はいくぶん感情の強烈なところもあり、文脈の乱れもありますが、論旨は明瞭であります。筆者が白痴になりたいという根拠は「純粋なもの」への熱烈なあこがれであるように思われます。

らだと思つた。(男)

生徒は主人公「私」を単純に作者のことと考へこんでいますが、それはむしろ当然のことで、独歩の人間愛の深さを云々することも非常に有意義であります。指導者の私として独歩についてある程度の説明を加えておかなくてはならない重要問題であります。しかし、この問題は独歩論を大きく展開することを決定的に要請しているわけではありません。それに高校一年の限界も考へる必要があります。

前述のとおり、このDの型には必ずといっていいほどCの型の文章が結びついて書かれていたのが特徴です。親子の愛にしろ子弟の愛にしろ発想型式は同じでありますから当然の傾向といえるでしょう。比較的倫理感覚の鋭い生徒かと思われれます。

最後のEの型について。例えば次のような感想がありました。

まず最初に感じたことは、作者が自然の偉大さ、神秘さに對し、人間を弱小で不思議なものと考え、自然と人間を対照し、そこに人生の不思議さを明らかにしたことです。特に『落葉を踏んで頂きに達し例の天主台の下まで行くと、寂々として満山声なき中に、何者か優しい声で歌うのが聞こえます。』という描写は、いかにも美しい清らかな情景です。(男)

独歩は自然の偉大さ神秘さに對して人間を弱いものふしぎなものと考えていたようだ。……(中略)……白痴の少年と雄大で美しい自然とが溶けあつて(そのとき白痴の少年は天使である)まるで詩のように鮮明に描き出されていると思う。(男)

詩を読みとつた——まさに散文で書かれた詩であります——だけ

で私はじゅうぶんといいたいくらいです。作中、湖のほとりであらうと話をしあう少年を歌つた『童なりけり』が引きあいに出版されています。ある女生徒は『イギリスの詩人ワーズワースの『童なりけり』をこの白痴の少年に結びつけたのはこの白痴の少年六蔵が自然美に關係しているように感じられた。』と、いみじくも読みあてていました。漠然とではあつても、独歩文学の精神的で浪漫的な世界に直接触れたことはまちがいありません。

以上、生徒の感想文にあらわれたところ、注目すべき主な例文を引きつつ概観してきました。なお、あまり大きく取扱うほどではない、浅い感想文もありました。が、感想文そのものの性質から申しましてつ、まらぬものとか、正しくないものとか言つて破り捨てるなどといったことは起りえません。指導者は愛と責任をもつて生徒作品に接すべきだからです。

さて四時限ですが、最終の時間でこれから学習のまとめをやりました。まとめに入る前に宿題となつていた話し合い、白痴は幸か不幸かをやってみました。私はむしろこの機会に話し方指導(したがつて聞き方指導)を腹案したわけで、席も両側に分け、発言者は自由に挙手するようなし方でやりましたが、話し方は論理的かどうか、相手の意見をよく聞いた反論であるかどうか、それとなく注意してやりました。議論のなりゆきはここに紹介する必要はないと思います。白痴不幸説は前述の感想Aの論で、幸説はBの論で戦つておりましたが、結論は出ようはずがありません。私は結論を出さなにかわりに、一つの助言をしました。『田園交響楽』(アンドレ・シイド)という小説のあらすじをごく簡単に話しまして、盲目の少女が

開眼するや否や自殺する理由を考えさせました。「見える、解るといふことが非常に幸福であるとは限らないし、また、文学が見えない人、解らない人の世界をしぼしぼ扱う事実は私にも興味がある。」とつけ加えました。(この問題を生徒がさらに追求して他の小説や詩に及んでくれるように祈ったからです。)

残る時間で、生徒が提出した他の問題をあらまし検討しました。作者独歩について少し触れておきました。ここで扱った他の問題というのは次のようなことです。

(一) 語句解釈——「寂々として満山声なき」「さぎをからすにいい黒めるといふ俗諺」「野分」「ひっきょう」「いびつ」「けげんな顔」など。

(二) 思想表現としての文意——「空の色、日の光、古い城跡、そして少年、まるで絵です。少年は天使です。」「いろいろと人生ふしぎの思い堪えなかつたのです。人類と他の動物との相違。人類と自然との関係。生命と死などという問題が年若い私の心に深い深い哀を起しました。」「私は思わず目をふさぎました。」なぜそうなのか？

(三) 題について
「なぜ『春の鳥』という題をつけたのか。鳥はわかるが、春がわからない。」

(四) その他
○「童なりけり」といふ詩が読みたい。

○口語法と文語法とがまじっている。(逐一文語法を調べさせたい)

○漱石と藤村と比較したい。

以上、私の『春の鳥』学習のルポルタージュでありました。最後に感想文の中に注目したい貴重な意見がありましたので紹介しておきます。

この作品が全部作者の体験によって書かれたのか、頭の中で作られたものなのか、私にはわからない。しかし、私たちはそれが実際にあったことであろうと作り話であろうと、そんな事にかかりなく作者の気持ちを理解できればよいのではなからうか。ちょうど抽象画をみて作者の気持ちを知ると同じように。私たちは個々人で小説の良さ、味わい方などが違っており、小説に対する考えもちがう。小説の良さ味わい方などの問題についても私たちが討論すべきで、授業中先生の講義をきくだけでなく、小説の味わい方について話し合いたい。(男)

四、その後

数日たつてから一生徒が作文を持って参りました。私は「しめた。」と正直のところ思いました。

私は一つの課を終了するたびに、こういう知識や思考をつねに発展させていくように生徒を指導することを人間の教育と考えているからであります。「読むことの学習」が「書くことの学習」に進展し、「聞くことの学習」が「話すことの学習」へ進展するようにも考え、一時間にあつてもこれらの機能を相互に高めるよう関連づけるのが地についた国語学習と考えていたからです。その生徒(仮りにAとします)は「田園交響楽」の感想でありました。私は評をつけて返しました。また書いてきました。また評をつけ、今度は亀井勝一郎の「愛の無常について」を紹介して返しました。また書いてきました。現在の家庭生活学校生活における悩みと悲しみでした。

応えてやりました。……作文の交換Ⅱ文章による対話が続きました。Aの書いた文章もすべて保存していました。半年の間の対話で私はとにかく逆立ちしてしまいそうな気がしたのは、国語指導であつたはずの作文が生活の指導（カウンセリング）になつてしまつたことなのです。ここが国語教師としての私の体験における最大の試練でした。——生活に結びつかない、極言すれば心に響かない国語学習に甘んじてはならないと思えばこそ。——そして、最後失敗しました。私は国語指導にはある程度成功し、人間教育に失敗したのです。

五 おわりに

四で言い足りないことを一言に圧縮いたします。国語教育は今日も明日も生きる生命。その場だけのものではありません。

△三十七年八月▽

（長崎県立松浦高等学校教諭）